現在の「学級がうまく機能しない状況」（いわゆる「学級崩壊」）の実態調査と克服すべき課題
―現在の「学級崩壊」とかつての「学級崩壊」との比較から課題を考える―

増田　修治・井上　恵子*

研究実績の概要

1、研究動機

そもそも、この研究をしたいと思ったのは、「学校現場が大変になっている」「学級がうまくいかなくて困っている」「新採教員が早期退職する」などの話を、見たり聞いたりしたことが始まりであった。

また、2019年10月に発表された『平成30年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』を見ると、暴力行為が、小１で3,335件、小２で4,311件となっており、平成18年度と比較すると小１が27.1倍、小２が18.1倍と増加している。途中で調査方法が変化したことを鑑み、平成29年度と平成30年度を比較してみると、１年生が1.42倍、２年生が1.43倍、全体でも1.3倍となっていた。少子化が進んでいるにも関わらず、暴力件数が増えていることを考えると、幼保小の接続に新たな課題があると考えざるを得ないのではないかと考えた。この『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』の経年変化を見ると、次のような驚くべき問題行動格差の縮小が見られた。

	１年生	６年生	格差
平成18年度	123人	1,720人	132.3倍
平成30年度	3,335人	6,450人	1.9倍

また、「学級がうまく機能しない状況」（いわゆる「学級崩壊」）によって、新任教師が辞職したり、たくさんの教職員がどのように手を打てば良いのかがわからず、佇んでいる状況が見えてきた。

今回の調査は、1998年度と比較することで、「どのような新しい課題や困難さ」が生まれているのかを浮かび上がらせていくためのものである。

今回、東京都Ａ市・Ｂ市・Ｃ市及び埼玉県Ｄ市のたくさんの教職員・教育委員会に協力していただくことができ、配布数2,700に対して、541名（回収率　20.0％）もの方の回答があった。

2、アンケート回答者の属性について

回答者の年齢層を見ると、20代～ 30代が289人で62％であった。また、教職の経験年数においても、１～ 20年未満が265人で88.4％である。このことから、比較的若くかつ経験年数が少ない教職員が回答していることがわかる。特に、１～ 10年未満の経験年数の教職員が50.9％で、回答者の過半数を占めている。担当学年では、５年生が最も多く、２割近くを占めている。

以上のことから、若い教職年数の少ない教職員の意識が強く反映しているアンケート結果であると言える。

3、研究で明らかになったこと

(1) 子どもの学習と精神面の成長について

「子どもの学習集中度」は、1998年度よりも高くなっているが、2019年度で50.3％となっており、集中度が高い児童と低い児童の1/2ずつに二分化されていることがわかる。また、「先生に反抗す

＊嘱託研究員

る子どもが増えている」では、2019年度の「そう思う」と「ややそう思う」について見ると、３・４年生の中学年で増え始め、５年生で一旦落ち着くが６年生で急増しており、４割近くの教師が「教師への反抗」が増えていると答えている。中学年の学習が難しくなることで、「学習についていけない子ども」が多くなり、それが日々のむかつきにつながっていると考えられる。また、６年生では学習の難しさに思春期特有の難しさが加わることで、反抗的な子どもが多くなると考えられる。

また、「『よい子』を振る舞う子が増えた」が、2019年度で48.5％となり、1998年度の35.4％から大幅に増えていることからも、大人や教師の前では「よい子」を演じている子が増えてきたと言える。こうしたことが、「静かな荒れ」と言われる状況につながっていると言える。

「静かな荒れ」とは、特に高学年に見られる現象である。教師がいくら質問したり、答えるように促しても、一切無視をするのである。表面的に荒れているわけではないが、子どもの心の中には、学校教育や教師そのものへの不満が渦巻いている状況を言う。

1998年度は、学級崩壊が大きな問題となったが、教員に本音をぶつけることができたと言える。現在の子どもは本音を言えず、「『よい子』を振る舞う子」が増えていることを考えると自分の本心や本音を言える雰囲気を作り出していくことが、現代教育の課題となっていることが考えられる。

(2) いじめの広がりとその背景

2019年度で「いじめが広がっている」について、「そう思う」「ややそう思う」が17.7％となっており、1998年度の7.9％から10ポイント近くも上がっている。「よい子」という仮面をかぶっている中で、不満や鬱屈した気持ちを「いじめ」という形で解消している部分があると考えられる。

増田が書籍にまとめた岩手県矢巾町の「いじめ自殺」の中で分かったことは、「被害者を挑発し手を出させることで『いじめではなくて、ケンカである』とカモフラージュする姿」や「いじめではなく、いじりだよ」というように見せていることである。こうした子どもの特徴を把握しておくことが、いじめを防ぐためにも必要である。

(3) 不登校の子どもの増加

「不登校の子どもが多い」については、2019年度が52.9％で1998年度48.7％となっており、若干増えている。文部科学省が発表した「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」によると、不登校児童は年々増加しており、平成30年度は44,841人となり、過去最高を記録している。割合としても0.7％になっている。

(4) 子どもの問題行動

子どもの問題行動の中で気になるのは、「キレる」「うざい」などの言葉であろう。1998年度が65.3％で、2019年度が47.3％になったことを考えると、そうした言葉が少なくなったことがわかる。しかし、教員の側は、約半数の子どもが「キレる」「うざい」という言葉を使っていると感じている。こうした子どもの中にある「ムカツキ」にどう対処していくかが、大きな課題であることが見えてきた。

(5) 学習や学校生活に関する行動

「学校で禁止されているものを持ってくる」の設問では、1998年度が22.4％であったものが2019年度で49.9％となっており、倍増していることがわかった。1998年度と比較して、ポイントが上がったものの一つになっている。３年担任のベテラン教師が自由記述欄で、「教師の力不足ももちろんありますが、教室内での問題行動、学力不振などは『強すぎる教育』『放任』『過保護』『シングルの家庭』などが土台にあって、指導はすれども改善はむずかしいと思います。」と書いている。

この行為は、「強すぎる教育」や教師や学校という権威に対してのささやかな抵抗であると考えられるのではないであろうか。あるいは、「禁止されたものを持ってくることでの仲間意識の共有」「スクールカーストを上位にするための一つの方法」などが理由として考えられるのではないだろうか。

(6) 教師と子どもの関係性と対教師暴力

「先生に暴力をふるう」では、1998年が3.1％で2019年度が9.6％になっている。なんと、約３倍にもなっている。これは、見過ごせない問題である。

「注意するとカッとなる」が「１名いる」が57名、「複数名いる」が20名であった。「先生に暴力をふるう」という設問とクロスマッチさせた結果は、次の通りであった。

	暴力がない	たまにある	よくある
カッとなる子が１名いる	38人（66.7％）	17人（29.8％）	2人（3.5％）
カッとなる子が複数名いる	11人（19.3％）	7人（12.3％）	2人（3.5％）

ここから分かることは、「カッとなる子がいる」ことと暴力につながっているケースは、28人で49.1％であった。キレやすい子がクラスにいる場合には、２分の１の確率で暴力が存在していることが分かった。

(7)「荒れ」に疲れている現場

「現在あなたの学校で子どもの『荒れ』や指導に疲れている方をご存じですか」では、「いる」と答えた方が50.3％もいる。1998年度よりは下がったものの、大きな課題が見えてきた。しかも、「複数名いる」と答えた教員が、３割近くいることは大きな問題である。

「現在、あなたの学校でここ数年間（１～３年間）に子どもの『荒れ』や指導の疲れで退職された先生はおられますか」では、「複数名いる」「１名いる」という回答者が34.3％で、1998年度の14.7％を大きく上回っていた。

特に、「複数名いる」と答えた教員が、３割近くいるということは、「困難さを共有できる職場であるか」「助け合える雰囲気があるか」などに関係していると考えられる。しかも、複数名辞職した場合、首都圏では代替教員（講師）が見つからないという問題が起きている。

(8) 家庭・保護者の状況

自由記述を見るとそこには保護者への対応に悩む教員が多いことに気が付いた。また、学校で「学級崩壊をもたらす子どもたち」の中には、家庭での問題を背負い登校してくる子どもたちも多い。のではないかと推測される。

(9) 教員の多忙な勤務実態と校内環境

今日の教員たちは権威の低下や指導力に悩み、問題視し、職員会議や校内研究に 期待している。勤務の多忙を自由記述で述べている教師は、多かった。

４、学級（学年）崩壊への対応

調査対象の市の中にあるＤ小学校は、全学年２クラスの小さな学校である。その小学校の５年生が荒れているということで、学級・学年の状況について2019年10月31日に聴き取り調査を行ったところ、「教職員への暴力や暴言」「子ども同士の暴言や暴力」「マイルールがあり、指示に従わない」「言葉での表現より、暴力に訴えることが多い」「他者を力で支配しようとする」などのことがわかった。

また、他責タイプの子どもの裏にいる他責タイプの親との対応が非常に難しいことが見えてきた。

5、最後に

増田の知っている教員は、有名私大出身である。その教員が、「教師を続けるかどうか」で悩んでいた。聞いてみると、「同じ大学出身の人がいい会社に勤め、年収1000万近くもらっている。しかも、休暇もしっかりとれている。なんでこんなに苦しい思いをしてまで、教師を続けなければいけないのかがわからない。この仕事はやりがいがあるとは思うが、労働条件から考えるととても合わないと思う。時給で計算したら、マクドナルドの時給の半分だった。子どももいるのに、我が子に十分力を注ぐことも出来ない。こんなに自己犠牲を払わなくてはいけない仕事はないと思う。」と涙ながらに語ってくれた。

いま手を打たなければ、教育は破綻するに違いない。そんな危機感を持たざるを得ない調査結果であった。

報告